

指示詞から感動詞へ

—— アノ (一) ・ソノ (一) について ——

岩 田 一 成

1. はじめに

本研究では、以下のようなアノ (一) ・ソノ (一)¹を対象に感動詞²の分析を行う。これらは指示詞が起源であると考えられるが、名詞が後続するアノ N・ソノ Nといった指示詞の形式が、(1) (2) (3) のように名詞に後続しない場合、それらを本稿では感動詞と考える。また、(4) のように名詞が後続したとしても、前後文脈から指示詞としての解釈ができないような場合は、感動詞と考える。(4) において「あのガイド」という指示詞解釈は成立しない。なお、感動詞と一言で言っても、(1) のように誰かに呼びかける用法や、(2) のように思考中に現れる用法など、さまざまなバリエーションがあるものとして本稿では扱う。

- (1) 「あのう…すみません」「や野球部の練習場はどこでしょうか」 (キャプテン：1)
- (2) 友人「算数ってわからんからやらないのかな やらないからわからんのかな」
ののちゃん「あっそれって」「あれでしょ どっちが先かっていう」「あのあのえーっと」
(ののちゃん：朝日2007.7.26)
- (3) (浮気現場にかけつけた妻)
妻「ちょっとあなた このメモ誰が書いたの？」
奥本「あ……いや」「その……」 (部：9)
- (4) 「あの…ガイドをやってくれるってきいてきたんですけど…」 (ジャングル：1)

2. 先行研究と本研究の目的

定延・田窪 (1995)、田窪・金水 (1997) では、本稿で対象とするアノ (一) ・ソノ (一) がエエトに対して使い分けを行っているという点を指摘している。そこでは、アノ (一) ・ソノ (一) が言語形式の製作という行動に対応し、エエトが心内の演算領域の確保に対応するという説明をしている。この主張は、多くの先行研究で引用されているため、改めてここで説明はしない。言語形式の製作としてアノ (一) ・ソノ (一) を捉える点は、本稿においても同じである。その先行研究を受けて発展させてきたのが金 (2006)、大工原 (2008)、堤 (2008) の研

¹ 本稿は先行研究と同じく、アノ・アノー・アノウ、ソノ・ソノー・ソノウ、をそれぞれ同種のものとして扱う。また同類であるという立場ではないが、議論の展開上適宜アノネ (一) といった形式も対象とする。

² アノ (一) ・ソノ (一) は、間投詞、感動詞、フィラーなどとさまざまな呼称で呼ばれているが、本研究では感動詞という用語を用いる。その理由としては、この呼称が先行研究において多数派であること、間投詞という用語を用いると、その名前に引きずられ談話冒頭に用いられる呼びかけの用法が見えにくくなること、の二点が挙げられる。

究で、アノ (一)・ソノ (一) の使い分けを論じている。本研究もこの流れの上に位置するものである。以下の二点に関しては金 (2006)、大工原 (2008)、堤 (2008) が一致して認めている点である。

- i 感動詞アノ (一)・ソノ (一) は何らかの基準で使い分けを行っている
- ii 感動詞アノ (一)・ソノ (一) は指示詞とのつながりが確認できる

定延 (2002:77) では、「意味を欠くように見える言語表現Aが意味を持つと言えるかどうかは、言語表現Aが言語表現A'とつながっているかどうかの判断しだいである。」と述べているように、i の使い分けを論じる上で、ii の論点は必要不可欠であるといえる。本稿でも、上の2点を前提として議論を進める。ここでは従来の研究と本稿の立場の違いを明確にし、研究目的を示したい。

2-1 先行研究との違い：使用するデータ

感動詞研究を概観すると談話データを用いているものが多い (山根2002、大工原2008、堤2008)。アノ (一)・ソノ (一) の区別に関しても、談話データによる分析で大きな成果を挙げてきている (大工原2008、堤2008)。ただし、談話データでは以下のように「言語形式」と捉えられないようなアノがたくさん出てくることもある。

- (5) 「みなさま、あの、あのそれでは、あの、これから、あの講師会議を、あのははじめたいと、思います。」

結果として、山根 (2002:238) のように、フィラー (本研究での対象を含む感動詞全般) は「音声現象」とせざるをえないという結論を出しているものもある³。そこで本研究では、文字化された会話文をデータとする。文字化された会話文とは、漫画や小説の会話文のことで、ある程度推敲を経た発話であるといえる。文字化された会話文では、少なくとも (5) のような文は出てこない。

また、談話データはあらかじめ設定された場面が存在しているため、使用場面のバリエーションを記述するのが難しい。大工原 (2008) の研究では、主に国立国語研究所の『日本語話し言葉コーパス』から、「模擬講演についてのインタビュー」と「課題指向対話」を用いている。これらはどちらも場面が固定された状況で、二人がインタビューや会話をするというものである。堤 (2008) は日本語教育で口頭能力を測定するために用いられるインタビューテスト、OPI (Oral Proficiency Interview) を主なデータとして用いており、これもまた場面を固定した状態で二人がインタビューを行なうものである。こういうデータからは (1) のような呼びかけ場面は現れず、また3-1で指摘するような、談話への割り込みという状況もありえない。

このように、文字化された会話文は談話データにでてくる「音声現象」をある程度排除し、使用場面のバリエーションを広く捉えることができるのではないかと考える。ここで断ってお

³ ただし、フィラーを狭くとらえれば「言語形式」とも定義できるとも指摘している。

きたいのは、文字化された会話文が万能であると主張するものではなく、本稿は従来の先行研究の議論を補完するものであるという点である。

2-2 目的

ここまで述べてきたように、従来談話データに基づく議論では指摘されてこなかったアノ（一）・ソノ（一）のバリエーションに光を当てて本稿では議論を行ないたい。文字化された会話文を扱うことで、様々な使用場面を記述する。使用場面のバリエーションが記述できれば、アノ（一）・ソノ（一）の区別も結果的に明らかになると考える。

本研究の目的：文字化された会話文から実例を収集し、アノ（一）・ソノ（一）の使用場面を詳細に分析し両者の違いを明らかにする

3. アノ（一）について

ここでは具体的な使用場面を収集することで、感動詞アノ（一）・ソノ（一）の機能を分類してゆく。ここでいう機能というのは先行研究でコミュニケーション効果とも呼ばれているものである。実際に用例を収集して見ると、大きく6種類に機能が分類できると考えられる。ただしここでの議論は、網羅的に分類することを目的としたものではなく、アノ（一）・ソノ（一）の多様な使用状況とその連続性を確認することが主目的である。6種類の機能とは談話開始前か後か、談話の流れを変えてしまうか変えないかという基準で大きく3分類し、それぞれを2機能に分けている（それぞれの2機能は3-1、3-2、3-3で区別の基準を論じる）。まとめると以下ようになる。

表1 機能分類の基準

談話開始前		談話開始後			
①呼びかけ	②談話への 割り込み	談話の流れを変える		談話の流れを変えない	
		③話題転換	④訂正・つつこみ・ たしなめ等	⑤言い淀み	⑥言葉探し

なお、データとして感動詞アノ（一）を100例収集した。実際には、アノ（一）・ソノ（一）を同時に収集しながら、アノ（一）が100例集まった段階で例文集めを終えた。終了時、ソノ（一）は48例集まっている（4. 節参照）。100例が十分な数であると主張するわけではなく、本研究が統計的な根拠のみで議論をすすめるものでもない。ただし、収集した例の中に、明らかな偏りがあれば、適宜指摘していく。

3-1 談話開始前の使用

表1にある‘談話開始前’というカテゴリーには、①呼びかけと②談話への割り込みがある。①タイプは1. 節で呼びかけ用法と呼んでいたもので、話者Aと話者Bの談話が始まっていない時点で、どちらかが談話を始めるマーカーである。それに対し②タイプは、話者Aと話者B

が対話をすでに開始している状況において、第三者が入ってくる時に使用されるものである。その第三者にとっては談話は開始していないわけであるから、これも広くは、談話を始めるマーカーである。

①呼びかけ

(6=1) 「あのう…すみません」「や野球部の練習場はどこでしょうか」

(7) 誘拐犯「二千万ポンド、用意できたか？」

女性「二百五十……」

誘拐犯「ふざけるな!!」

女性「本当に私達には……」

誘拐犯「……」

女性「もしもし…」「あの、もしもし…」

(マスタ：4)

(6) のような例はたくさん見つかる。「あのう、すみません」でセットフレーズになっていると言っても過言ではない。このような状況では、見知らぬ人に対して使われることが圧倒的に多い。これは定延・田窪 (1995)、田窪・金水 (1997) などですすでに指摘されているように、アノ (一) が丁寧なニュアンスを持つことと関係があるであろう。談話を始めるマーカーと捉えるなら、途切れた談話を再開するような状況である (7) も、呼びかけに含めることができる。

②談話への割り込み

(8) 百合子「だけどお父さん、インド=ヨーロッパ語族には、なんの考古学的裏付けもない
んでしょ？」

キートン「あくまでも、語学上の仮説だね。」

百合子「……要するに、考古学者の怠慢でしょ。」

田島「あ……あの、田島昇です……」

(マスタ：1)

(9) (興奮してターちゃんをボコボコにするジェーン)

ジェーン「いいわよナパちゃん」

執事「あの一出番ですけどやれます？」

(ジャングル：1)

(8) (9)で、すでに談話を行っている両者にとって第三者は割り込みしてきたわけであるが、第三者にとっては、談話を開始しているとも言える。

3-2 談話開始後の使用：談話の流れを変えるもの

表1で‘談話開始後：談話の流れを変える’のカテゴリーに入るものは、③話題転換と④訂正・つつこみ・たしなめ等である。両者は共に、談話開始後に用いられる点で3-1の用例とは異なる。そして両者は談話の流れを変えるという共通点を持つが、話題を変えてしまう③タイプはいわば大きな談話転換とも言えるが、④タイプの訂正・つつこみ・たしなめ等といった機能は、同じ話題の中で談話の流れを少し変えるものであり、いわば小さな談話転換と言える。

③話題転換⁴

- (10) 新入社員「素敵な店ですね」「高田馬場のつぼ七とはちがうな」
 島「ははは気に入ってもらえてよかった」
 新入社員「あの 課長! あらかじめこの点は はっきりしておきたいんです 今日
 リカンでお願いします」 (島:5)
- (11) (ここまでピッチングフォームについて議論している)
 谷口「なるほどバックスイングね。」
 イガラシ「あのちょっとアンダーシャツをかえてきます」 (キャプテン:2)

この2例は、ともにアノ(一)を使う前と後で、話題の流れが変わってしまっている。アノ(一)を使うことがきっかけとなり、発話者はこれまでの流れとは無関係に自分の言いたいことを伝えている。③タイプを大きな談話転換と呼んだ所以である。

④訂正・つっこみ・たしなめ等

- (12) テツ「そおゆうたらさっきマサルのアホがきて」「満州にいくゆうとったど」
 チエ「エッ」
 ヒラメ「マンシュウ!?」「あの……信州とちゃう？」 (チエ:34)
- (13) 拳道家「あ あんな拳の出し方は…今まで見た事ないな」
 ターちゃん「じゃん拳」
 ジェーン「ピンポン」
 李「あいこでしょ!!」
 ジェーン「これは」
 ターちゃん「アキレス腱」
 拳道家「あの～まじめにきいてほしいんですけど」 (ジャングル:2)
- (14) (子供の教育に関してせっかちなトニー、子供は8ヵ月)
 トニー「そろそろ笛どうかなー 取ってくれる？」
 さおり「あのーうちの子モーツァルトじゃないと思うんで…」 (ダーリン)

相手の言い間違いを訂正している(12)、ふざけている相手に対してつこんでいる(13)、せっかちな相手をたしなめている(14)、これらは前置きしてから談話の流れを少し変えるという点で共通している。ただし、話題そのものを変えてしまうわけではない。例えば(12)の例ではマサルがどこへ行ったのかという話題で談話が進行しているが、‘マンシュウ’を‘信州’に訂正したところで、話題そのものを変えることにはならない。収集した例とは形式が少し異なるが、(15)のように「あのねえ」の形で反論のマーカーになっているものは、この用法の延長線上にあると考えられる。

- (15) 近所の人「おまわりさん、あれ!!」

⁴ 山根(2002)では、フィラーの機能の中で「あの」も扱われており、注意喚起、言いにくさの表明などが指摘されている。そこでは機能を列挙して指摘しているのみで、機能間の連続性に注目はしていない。

(キートンを動物誘拐犯だと思っている)

警官「なるほど、動かぬ証拠だ。」

キートン「あのねえ……」

警官「それに外の車あんだのでしょ。」「ここ駐車禁止だよ。」

(マスタ：8)

3-3 談話開始後の使用：談話の流れを変えないもの

このカテゴリーは、談話開始後に用いられる点では3-2の③、④と共通するが、談話の流れに沿って進行する点において異なる。いわゆるフィラーなどと呼ばれているものである。⑤言い淀みと⑥言葉探しの違いは、後に来る内容が、自分にとって言いにくいものであるかどうかである。

⑤言い淀み

(16) 一豊「奥がどう申したか、くわしく、いちぶしじゅう、申してみよ」

お里「あの」はずかしらしい。

一豊「主命である、申してみよ」

お里「あの、奥方さまは、とのさまのお胤を頂戴するようにと申されましてござりまする」

(功名)

(17) (ノックしているキャプテンに対して)

谷口「キャプテン…」

キャプテン「なんだ」

谷口「あの…」「お話したいことがあるんです…」

(以前在籍していた学校で補欠だったことを話したい)

(キャプテン：1)

言いにくいことをどのようにうまく伝えるかというのは言語形式の製作における一つの大きな動機ではないだろうか。(16)のように、女性が性的なことを口にするのは言いにくいことであるし、(17)においては、現在尊敬されている谷口が前所属していたチームで補欠だったということを言い出そうとするシーンである。ここでの例にある‘言いにくいこと’とは、裏を返せば「言いにくいけれど伝えなければならないこと」であり、訂正・つっこみ・たしなめ等との連続性もある。言いにくくてかつ言わなくてもいいことなら、言語形式を製作する必要はない。

⑥言葉探し

(18=2) ののちゃん「あっそれって」「あれでしょ どっちが先かっていう」「あのあのえーっと」

(19) 同僚の教員「待ちなさい その顔のケガはどうしたんだね 君イ」

川藤「え…ああ、これですか、えーと…あの…」「ちょっと転びまして…」

(実は学生に殴られた)

(ルーキーズ：1)

これらは言いにくいことが後続するわけではない。(18)の例は「鶏が先かたまごが先か」ということわざが出てこなくて、言葉探しをしている。(19)は、教師が学生に殴られたという

言いにくい内容ではある。そういう点で、⑤のタイプとも連続しているが、大きな違いは「言いにくいけれど、伝える必要がない（と判断している）こと」だということである。ここでは、言いにくいことをそのまま伝えるなら⑤言い淀みに、言いにくいことを適当にごまかす場面なら⑥言葉探しに分けられると考えている。

3-4 考察・アノ（一）

ここまでの事例を収集・分析してみてもまず指摘しておきたいポイントは、アノ（一）が（19）の例以外すべて談話の冒頭もしくは文頭に来ているということである。これは次に見ていくソノ（一）と比べると対照的である。また、①呼びかけと⑥言葉探しの間には相違点が認められるのと同時に、①から⑥の用法間に連続性が認められるということも確認したい。用法間の連続性を検証するに当たり、検索と注意喚起という少し抽象的な機能を導入したい。

多くの先行研究で指摘しているように、アノ（一）は検索のマーカである。それが典型的に現れるのは⑤⑥のような言い淀み・言葉探しの例である。ただし、①②③④の用法も当然検索と関わっており、何かを探しているというニュアンスがそれぞれに感じ取れる。定延・田窪（1995）他多くの研究が指摘しているように、①呼びかけの用法において、発話のぞんざいさ・さしでがましさを軽減することができるのは、発話形式に気を配っているという検索機能があるからである。発話のぞんざいさ・さしでがましさを軽減するという点では、②談話への割り込み、③話題転換、④訂正・つっこみ・たしなめ等すべてに検索機能の痕跡が見られる。（13）の「あの～まじめにきいてほしいんですけど」というよそよそしいつっこみは「おい、まじめにきけ」と比較すれば明らかである。

また、誰かに呼びかけたり（①）、談話へ割り込んだり（②）、話題を転換したり（③）、訂正・つっこみ・たしなめ等（④）のときのアノ（一）は、相手の注意をこちらに向けるためのものでもある。「次に話すことを聞いてください」というマーカである。ここではそれを注意喚起と呼びたい。⑤の言い淀みや⑥の言葉探しは、一見注意喚起の機能がなさそうに見える。しかし、定延・田窪（1995）森山（2000）などが指摘しているように、アノ（一）は「独り言には使用できない」ので、相手の存在を前提とするマーカである。また「発話権の維持」という視点から考えても、聞き手に対するなんらかのメッセージを送っていると言える。ここに聞き手への注意喚起という形跡が見られる。

以上の議論をまとめると、様々な用法間の連続性は、検索・注意喚起という抽象的な機能が結びつくときのバランスの違いで説明が可能になる。検索機能が色濃く現れると⑥言葉探し寄りになり、注意喚起が色濃く現れると①呼びかけ寄りになる。



図1 用法の統合と連続性

4. ソノ（一）について

ソノ（一）は、アノ（一）に比べて用例が少なく、収集したのは48例である。その中で、①呼びかけ、②談話への割り込み、③話題転換、④訂正・つつこみ・たしなめ等にあたる例は見つからなかった。収集例のみで議論を進めるのは難しいので、以下のように置き換えをしてみる。判断が難しいものもあるが、比較すればアノ（一）のほうがすわりがいいのではないだろうか。

①呼びかけ

‘(1) 「あのう/*そのう ……すみません」

②談話への割り込み

‘(8) 「あ……あの/?そ……その）、田島昇です……」

③話題転換

‘(10) 「あの/?その）課長！あらかじめこの点は……」

④訂正・つつこみ・たしなめ等

‘(12) 「あの/?その）……信州とちゃう？」

上記の例文に？を付けたが、感動詞研究は内省が非常に難しく、それぞれの例でソノ（一）は絶対に使えないとは言いきれないところがある。そこが、これまでの感動詞研究を難しくしているところではないだろうか⁵。ただ、子供などの談話開始マーカーとして用いられる「あのね」という形式は、①の呼びかけから派生したものであると考えられるが、それを「そのね」という形式には変えられない。

(20) 「おかあさん、あのね/*そのね ……」

このような用法が特定化している形式であれば、あ系とそ系の違いを内省で議論することも可能である。

4-1 用例の分類

ここまで①②③④タイプに関して用例が見つからなかったことを述べたが、⑤言い淀みや⑥言葉探しはソノ（一）も用いられている。(21) (22) (23) の例は、「浮気がばれて状況を説明する」「大会出場を棄権させる」「横領がばれて状況を説明する」といった言いにくいことが後続している。それに対し、(24) (25) は相手のすごさを表す言葉が出てこない状況、浮気が濡れ衣であることを説明する言葉が出てこない状況で使われており、言いにくいことが後続するというよりは、単に言葉を探している状況であると言える。3-3で述べたように、⑤⑥は連続しているが、浮気現場を例にとると、(21) のようにそれがばれてしまった状況は⑤へ、(25) のようにそれが誤解で説明しようとする⑥へ便宜的に分類している。

⑤言い淀み

(21=3) (浮気現場にかけつけた妻)

⁵ 5-2で述べるが、大工原（2008）ではこの容認度の違いをアンケートで調査している。

妻「ちょっとあなた このメモ誰が書いたの？」

奥本「あ……いや」「その……」

(22) イガラシ「なんでしょうか話って？」

校長「じ じつはね……その一えーと…… (大会棄権を促したい)」 (キャプテン：6)

(23) (横領を追及するシーン)

高市「細かいことだけども必ず呉服店の納入伝票とうちの支払い伝票の金額に20万円の誤差があったの」「説明してくれる？」

経理担当「あ」「それはその一……」「私は」 (取：1)

⑥言葉探し

(24) 牧野「で どうすげえてんだい」

近藤「どうってその一」 (キャプテン：14)

(25) ジェーン「この浮気もの!!」

ターちゃん (全くの濡れ衣)「だからその一つまり…」 (ジャングル:1)

4-2 考察・ソノ (一)

収集したデータでは、「いやその一」「それはその一」「だからその一」のように、前に何か言ってからソノ (一) が発話されている。この点はアノ (一) と対照的である。しかも、すべての例において、相手の質問・詰問に対する答えとして発話されている。つまり、相手からの質問・詰問に対して、言いたくない答えなら⑤タイプ、単に言葉が見つからないときは⑥タイプになると言える。ソノ (一) の特徴は先行する文脈に依存していると言うことがいえる。

定延 (2002) では感動詞「そう」を扱っている。定延は「田中は学生で鈴木もそうだ。」における‘そう’を照応詞として、それが感動詞の「そう」とつながっているという指摘をしている。そこでは、感動詞「そう」には照応詞の意味「先行文脈への言及」が残存していると述べており、これは本研究で扱っている感動詞ソノ (一) と平行する現象である。

実例を概観してみると、ソノ (一) だけに特有の機能というものは認められない。先行研究では、ソノ (一) だけに見られるコミュニケーション上の効果 (本研究では機能と呼ぶ) を指摘しているが、ここではそれらの指摘について議論したい。大工原 (2008:59) では、ソノ (一) が「話題を戻す」という談話管理的効果を生むとして、「一方、「あの (一)」に「話題を戻す」という効果 (含み) は認められない。」と述べている。しかし、3-2 で述べたように、話題を転換するためのアノ (一) の使用は実例に見られる。「話題を戻す」ということは、話題転換の一種なので、当然、アノ (一) が話題を戻す例も存在する。

(26) (妻を追い出した今野)

今野「あの頃は美人やったが最近はただの太ったオバハンや」「サギにあったみたいなものやケケケケ」

島「あのう……たたき出したって言われましたけどどこへ？」 (数コマ前に今野がそう言ってる)

今野「離婚した……もう届けも出した」 (部：13)

このような議論になるのは、大工原がインタビューデータに基づいているためである。インタビューというのは、インタビュアー発の話題などありえず、常にインタビューイの話題について進行していく。つまり話題は固定され、質問の仕事も固定された状況での狭いデータによるものである。広く場面設定をすれば、アノ（－）もソノ（－）も「話題を戻す」ことができる。

また、堤（2008）、大工原（2008）はともに、「言いくさ」「言い訳っぽさ」をソノ（－）の特有のニュアンスとしているが、本稿では3-3で論じたとおり、言いくさを表す例は、アノ（－）にも実例がある。両者に別々のコミュニケーション効果を認めなくても用例は説明可能である。アノ（－）・ソノ（－）共に「言いくさ」を示す用法があるが、ソノ（－）は相手の質問・詰問に対して用いられるため、結果的に「言いくさ」に「言い訳っぽさ」のニュアンスが加わるだけである。

5. アノ（－）・ソノ（－）比較と分析

ここまで見てきた用法の記述をまとめると、表2のようになる。この表から、アノ（－）・ソノ（－）の分布には明らかな偏りがあり、使い分けが行なわれていることがわかる。①呼びかけ、②談話への割り込み、③話題転換、④訂正・つっこみ・たしなめ等は、アノ（－）に固有の用法であると言える。一方、⑤言い淀み、⑥言葉探しについては、両者の存在が確認できる。ここから、機能自体にアノ（－）・ソノ（－）の違いがあるわけではなく、分布に偏りがあるだけであるということが見て取れる。それでは、この分布の偏りはどのように説明できるだろうか。ここでは、まず本稿の立場を表明した後で、先行研究との関連を指摘したい。

表2 アノ（－）・ソノ（－）比較

	①	②	③	④	⑤	⑥
あの	○	○	○	○	○	○
その	×	×	×	×	○	○

5-1 本稿の立場

表2の分布を見ると、①呼びかけ、②談話への割り込み、③話題転換、④訂正・つっこみ・たしなめ等といった、アノ（－）固有の用法と考えられるものには、共通点があるといえる。それは、話し手の話題が続くという点である。これらは、呼びかけて自分の話を切り出した後、談話に割り込んで何か言いたい事を言ったり、話題転換をして自分の話題に変えたりという用法である。一方、⑤言い淀み、⑥言葉探しに関しては、自分の話題を引っ張ることもあれば、他人から聞かれたり問い詰められてして行くこともある。ソノ（－）は質問・詰問の答えとして用いられ、先行文脈への依存が見られることはすでに述べたが、①②③④が使用できないのは自分発の話題ではないからであるという説明が可能である。

ここで、直示という概念が有効ではないかと考えられる。直示の定義を金水（1999）に従うと、「談話に先立って、言語外世界にあらかじめ存在すると話し手が認める対象を直接指し示し、言語的文脈に取り込むことである。（金水1999：68）」ということになる。つまり、言語外

世界の対象を扱うのがあ系指示詞、先行文脈によって概念的に設定された対象を扱うのがそ系指示詞ということである。これは指示詞としてのあ系とそ系の違いを説明するための概念であるが、そのまま感動詞のアノ(一)・ソノ(一)に使えろと考える。ただし、指示詞とは異なり、感動詞には指示対象が存在するわけではない。しかし、検索を行う際にはその検索内容がどういった情報なのか、注意喚起を行う際にはどんな情報に注意を向けたいのか、その情報が直示領域にあるものかどうか決定することは可能である。談話に先立って存在する情報を切り出したり、言いよんだりするときのマーカーがアノ(一)であり、先行文脈にある情報についてはソノ(一)が用いられる。4-2では、ソノ(一)はアノ(一)よりも出現数が少なく、相手からの質問・詰問に対して用いるという使用条件の存在を指摘した。

仮説：検索・注意喚起を行なう際、直示領域の情報を参照しているときはアノ(一)、非直示領域の情報を参照しているならソノ(一)が用いられる

本研究の立場では、アノ(一)・ソノ(一)を使い分けることによって、情報の存在場所(直示情報なのかどうか)を常に示しながら、我々がコミュニケーションを行っていると考ええる。

5-2 先行研究との関連

ここでは、アノ(一)・ソノ(一)の使い分けに関する先行研究の指摘を整理し、本稿との関連を議論したい。大工原(2008)では「あの一、すみません」と「その一、すみません」の容認度をアンケート調査し、98%の人がソノ(一)は不自然であると判断したことを報告している。その結果を元に、ソノ(一)は「言語的文脈を十分にふまえて言語形式を製作する。(大工原2008:55)」と指摘している。論拠は同じではないが、金(2006)も同様の立場である。両者は先行文脈が存在すれば、ソノ(一)の使用が許容されるという点を指摘している。

それを受けて堤(2008:21)では「何らかの状況により、話者が語彙や表現形式をより洗練されたものにしたたり、誤解を招かないようなものにしたたり等、より慎重な言語編集作業を行う必要に迫られた時、ソノが使用される。」と主張している。堤はアノに関しては定延・田窪(1995)の「名前の検索と、適切な表現の検討」という説明を採用し、ソノは「直感的な言い方をすれば、より注意深い編集作業が行われなければならないような状況下ではソノが用いられると考えられるのである(21)」という説明を追加している。

先行研究の指摘はどれも対象とする現象を説明する際に有効であると考ええる。そして、両者は決して衝突する議論ではないということをここで示したい。言語文脈で考える大工原、言語編集の慎重さで説明する堤、実は同じ現象の原因と結果を示していると考ええる。本稿5-1の議論や仮説では、主張に至るプロセスが異なるとはいえ、言語文脈で説明をする大工原と同じ指摘をしている。文字化された会話文からは、言語文脈の有無がはっきりと結果に出てくるからである。しかし、その言語文脈とは何かと言えば、相手からの質問や詰問であることが4-2で明らかになった。つまり、質問や詰問に対する答えという文脈条件があるために、「より慎重な言語編集作業」という堤(2008)の主張が出てくるのである。他にも本稿の立場は以下のような長所がある。

- i 本稿で収集した用例の各種機能（表1）や分布（表2）をうまく説明できる。
- ii 指示詞研究におけるあ系・そ系の使い分けと同じ説明ができる。
- iii 他のそ系感動詞研究とのつながりが指摘できる。

iについては、呼びかけなどはアノ（一）しか用いられないが、これから話したい内容は、談話に先立って、言語外世界に存在するものであり、直示情報を参照しているという説明が出来る。また、相手からの詰問、質問という状況がソノ（一）の特徴であったが、これらは非直示情報を参照しているわけである。iiについては先行研究もたびたび指摘しているが、感動詞の使い分けを直示的・非直示的に説明すれば、指示詞の使い分けとの連続性が明らかである⁶。iiiについては、4-2で紹介した定延（2002）の「そう」の研究が当てはまる。そこでは感動詞「そう」に「先行文脈への言及」という照応詞の意味が残存していることを指摘していた。同じソ系感動詞と同じ説明ができるというのは、できるだけ多くの言語現象を一貫した形で説明するという言語研究の目的に合うのではないだろうか。

6. まとめ

本稿で検討したデータから主張したかったことは、以下の3点に集約できる。

- i アノは基本的に談話の冒頭か文頭に現れるが、ソノは相手の質問・詰問に対する答えとして現れる
- ii 便宜上6種類に分類した各種機能（表1参照）は、注意喚起・検索という抽象的機能の結びつきにおけるバランス（図1参照）で説明ができる
- iii 感動詞アノ（一）・ソノ（一）は機能自体が異なるわけではなく、各種機能の分布に偏りがある（表2参照）だけである

本稿では文字化された会話文として漫画や小説の会話文をデータに用いた。使用場面の様々なバリエーションを記述するには非常に有効であるというのがその理由であるが、創作されたデータであるという点は研究の限界も示している。様々なデータを用いて多面的にアプローチしていくことの重要性が伝われば幸いである。

【用例出典（本文中出典横の数字は巻数を表す）】

- （キャプテン）『キャプテン』ちばあきお JCS集英社
- （功名）『功名が辻』司馬遼太郎 文春文庫
- （鳥）『課長 鳥耕作』弘兼憲史 講談社
- （ジャングル）『新ジャングルの王者ターちゃん』徳弘正也 集英社

⁶ 堤（2008）、大工原（2008）は共に、直接経験領域（現場、記憶）・間接経験領域（談話の中に呈示）という概念（田窪・金水2000などで提案されている）で感動詞アノ（一）・ソノ（一）を説明しようと試みている。指示詞とのつながりを指摘している点においては本稿も同じ立場である。

- (ダーリン)『ダーリンは外国人 with baby』小栗左多里&トニー・ラズロ メディアファクトリー
- (チエ)『じゃりん子チエ』はるき悦巳 双葉社
- (取)『取締役 島耕作』弘兼憲史 講談社
- (ののちゃん)「ののちゃん」(『朝日新聞』掲載の漫画)朝日新聞社
- (部)『部長 島耕作』弘兼憲史 講談社
- (マスタ)『MASTER KEATON』浦沢直樹・画 勝鹿北星・作 小学館
- (ルーキーズ)『ROOKIES』森田まさのり 集英社

【参考文献】

- 大工原勇人 (2008) 「指示詞系フィラー「あの (-)」・「その (-)」の用法」『日本語教育』138 : 53-62.
- 金善美 (2006) 「コ・ソ・アとi・ku・ceの感情的直示用法と間投詞の用法について」『言語文化』8(4) : 761-790. 同志社大学.
- 金水敏 (1999) 「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』6(4) : 67-91. 言語処理学会.
- 森山卓郎 (2000) 『ここからはじまる日本語文法』ひつじ書房.
- 定延利之 (2002) 「「うん」と「そう」に意味はあるか」定延利之 (編) 『「うん」と「そう」の言語学』 : 75-112. ひつじ書房.
- 定延利之・田窪行則 (1995) 「談話における心的操作モニター機構 一心的操作標識「ええと」「あのー」「ー」」『言語研究』108 : 74-93.
- 田窪行則・金水敏 (1997) 「応答詞・感動詞の談話的機能」『文法と音声』 : 257-279. くろしお出版.
- 田窪行則・金水敏 (2000) 「複数の心的領域による談話管理」坂原茂 (編) 『認知言語学の発展』 : 251-280. ひつじ書房.
- 堤良一 (2008) 「談話中に現れる間投詞アノ (-)・ソノ (-)の使い分けについて」『日本語科学』23 : 17-36.
- 山根智恵 (2002) 『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版.

本研究は、2013年度JSPS科研費22520481 (基盤研究 (C)) 『日本語の連文における「接続語」の理論的基盤の構築』代表者：岡崎友子) の助成を受けて行っている。

(いわた・かずなり)